國學院大學学術情報リポジトリ

# 〔取り組みリポート〕英語のListening力向上のための授業における取り組み：テレビニュースを聞き取る



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-09 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 小野, 雅子 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00002120 |

取り組みリポート

# 英語のListening力向上のための授業における取り組み：テレビニュースを聞き取る

小野　雅子


## 【要　旨】

ネイティヴ・イングリッシュ・スピーカーの話す英語は速くて聞き取れないと学生たちが言う。

CNNニュースでは、多様な英語を聞き取ることができるので、授業では、『CNN Student News』または『CNN　ビデオで見る世界のニュース』を使っている。副教材として、英語の歌やアメリカのドラマ『奥様は魔女』を使っている。

授業で、「聞く力」とは何かを学生に考えさせることがもっとも重要だと考えている。英語を聞く際に、言語だけではなく、非言語の部分からも情報を得ることが重要である。「聞く力」には、理解力、分析力、想像力等の能力を含む。

CNNニュースを理解するために、映像からの情報を得るように学生に教示している。たとえば、アナウンサー、レポーター、インタビューをされる人物の表情、仕草などから、推測して内容について考えるように言う。映像から内容を推測させ、音声に慣れたあと、学生たちは、日本語訳で内容の確認をすることになる。それから、単語を確認し、最後に英文のスクリプトを読む。このような段階的なステップを踏んで、学生たちは、CNNのネイティヴ・イングリッシュ・スピーカーが話す英語を聞き取ることができるようになる。



## 【キーワード】

聞く力、非言語での情報、CNNニュース、ネイティヴ・イングリッシュ・スピーカーによって話される英語に慣れること、様々な種類の英語に慣れること


「読む、書く、聞く、話す」の４技能は、多くの言語における基本技能である。

４技能は、グローバル化の進んでいる世界で、コミュニケーションをとる際に、必要なものなので、総合的に上げていく必要がある。そこで、國學院大學で、２年生のReading & Writingの授業でも、ListeningとスピーチをさせるSpeakingを取り入れた授業を行ってきたが、今年、２年生のListening & Speakingという半期科目を受け持ち、ListeningとSpeakingに焦点を当てる授業を行う機会を得た。その結果、Listening力向上のメリットや、その重要性について再認識した。「聞き取ることができない」ことが最大のネックになって、英語全体に対する苦手意識と学習意欲の低下につながっているが、逆に、「聞く力」が向上すると、学生たちの英語への関心や学習意欲が高まることを、授業を通してわかってきたからである。

筆者は、英語教員として、「外国人の話す英語が聞き取れた」という喜びを持ち、「英語を聞くのが楽しい」と思ってもらいたいと考え、授業で、Listening力向上のために試行錯誤してきた。拙論は、今も進行中のその試行錯誤について記述したものである。

## １．学生の現状

TOEIC等資格試験の点数向上が叫ばれている中、筆者も、以前、他校で、TOEICのListening試験対策のテキストを使ったことがある。だが、思うように、学生のListening力は伸びなかった。

TOEICは資格試験である以上、試験の信頼性と妥当性から、米語、英語等の違いはあるものの、問題を読む人たちの声のトーンや速さは類似し、極端な訛りや癖はない。そのため、テキストによって、学生も、問題に慣れる面はある。しかし、Part 1の写真を見て答える問題はできるようになっても、会話文の内容を問うPart 3や、長い文章が読まれるPart 4の問題は、なかなかできるようにはならなかった。やってもできるようにならないので、嫌気がさし、飽きたり、自信を喪失する学生の姿を見てきた。資格試験は、ただ就職に有利ということから、英語が好きではないものの、仕方なく受ける学生もいるのが現状だろう。

そこで、筆者は、TOEICのListening対策のテキストを使うことをやめ、資格試験を念頭に置きながら、まずは、英語を楽しく聞いてもらうことから始めることにした。学生たちも、英語を聞くことが楽しくなれば、TOEICに限らず、自分の英語力を客観的に図る物差しであるTOEFL、英検、ケンブリッジ英検等資格試験に挑戦しようとする可能性も出てくるのではないかと考えたからである。

> 学習においても、達成感、あるいは成功体験が得られることで、脳は報酬を予測できるようになる。報酬の予測ができると、また次にも新しいことに挑戦する勇気が湧いてくる。学習には、このようにマイナスではなく、プラスの感情がどうしても必要になる。（甘利、p.233）

このような説を踏まえ、英語を聞き取ることができるという喜びと達成感、成功体験を持ち、Listeningは楽しいと思ってもらえるようにしてから、TOEICのような試験に触れさせることにしたのである。

## ２．Listeningの授業における基本方針

Listening力向上について、英語教育法から音声学に至るまで、様々な教授法が提言され、筆者も、色々試みたが、なかなか成果がでなかった。

Listening力は、日本語では、「聞く力」とか「聞き取りの能力」という言い方になるだろうか。言語における「聞く力」とは何なのだろうか。その問いをきっかけに、筆者は、英語だけではなく、日本語における自身の「聞く力」を検証し、「聞く」ことの本質について考えるようになった。そして、英語に限らない「聞く力」の捉え方を学生に示唆し、

学生にも考えさせるというやり方を授業の基本方針とするようになったのである。

## ３.「聞く力」の考察

授業でListeningについて教え、また臨床心理学における「傾聴」を学んだりする中で、「聞く力」は、言語以外の多くの側面と関わると考えるようになった。

ルービンは、外国語を学ぶ際、言語以外の知識として、話を理解するのに、「場所に関する知識を利用する」、「ジェスチャーや顔の表情を利用する」、「動作や会話の当事者に関する情報を利用する」ことが有益であると書いている（ルービン、pp.124-25）。筆者は、この指摘は、外国語に限らず、母国語でも同じで、すべての言語で、「聞く」ことについて、あてはまるものであると思う。

Listeningを、非言語という側面から考えるヒントを与えてくれるのが、臨床心理学のアセスメント面接である。馬場（2007）は次のように述べている。

> 話の内容ばかりでなく、その話し方や態度外見などにも、その人を理解するための情報が多く含まれている。態度（表情や口調も含む）には、不安、緊張、高揚、抑うつといった、そのときの情緒の状態が反映されている。また話の仕方（観念的、感情的、自罰的、他罰的、冗漫、簡潔など）には、自己表現と自己抑制の仕方（防衛・適応様式）が反映されている。話し方から知的機能の障害や低下が示唆されることもある。外見、服装などは、本人の好み（文化）や自己意識を反映するばかりでなく、特異な服装や服装の乱れは、身じまいへの関心を失っている閉じこもった状態を疑わせるものである。このように、話している人全体から伝わってくるものも、査定者に多くの情報をもたらすものである。（馬場、p.58）

コミュニケーションとは、言語と非言語の両方によるものであることが、このような心理カウンセリングにおける見識からも見えてくる。

能動性もキーワードである。Listeningは、「受信」であっても、ただ漠然と受動的に聞いているのではない。聞く側には、理解力、分析力、判断力、推測する力、想像力、共感力、話されている内容についての知識や情報が必要であるが、さらに、話す内容を理解し推測しようとする能動的姿勢が必要である。

> 話を聞き続けようとするとき、次の段階では、その話の内容から、聞き手は何がしかの「発見」を求めようとします。新しい情報や知識、思想など、聞き手の「選択」の心にかなった「発見」のあるなしでその話の価値が決まるのです。私たちは話を聞きながら、無意識のうちに、絶えず頭のなかでこの「予測」と「選択」と発見のスイッチ作用を反復させながら、相手の話と自分の考えの間を行ったり来たりしているのです。（加瀬、

p.122）

こうした能動的な意識は、聞き方の違いとなってくる。

日本語でも英語でも、耳に入ってくるという意味合いの「聞く」と注意をして「聞く」ことに違いがある。加瀬（2001）は次のように述べている。

「聞く」と「聴く」、“hear”と“listen”はどう違うのでしょうか。辞書によれば、次のように説明されています。
「聞く」：音や声などを耳で感じ取る
「聴く」：聞いた内容を理解してそれに応じる。意識を集中して聞き取る。
「訊く」：尋ねる、問う。
英語では、
“hear”：聞く、聞こえる、耳にする
“listen”：聴く、傾聴する、とあります。

（中略）

「聴く」ということは意識を集中して聞き取る、聞いた内容を理解して、それに応じるという能動的な行為です。意識を集中して人の話を聞くためには、やはりそれなりの努力と忍耐とエネルギーを必要とします。話が10分、20分と長くなればなるほど、集中して聞くことが難しくなってきます。本当に意識して聞くことができるのはせいぜい１時間くらいのものです。聴くことの訓練を受けた人とそうでない人とでは、その聴き取りに大きな差が出てきます。

（中略）

このように「きく」ことの意味と働きを考えてきますと、コミュニケーションのために必要な「きき方」は何かといえば、それは、「聴く」ことであるということになります。（加瀬、pp.119-120）

教員として、授業を行っていて感じることだが、同じ内容でも、学生の聞き方次第で、授業のしやすさが異なったり、さらには、授業がうまく運んだりする。実は、円滑なコミュニケーションの主導権を、聞き手が握る場面も多いのではないか。

こうした考察を経て、筆者は、英語のListeningの授業で、ただ英語の音を聞くのではなく、「聞く力」を磨きながら、英語を聞くようにさせている。

## ４．教材の活用法

現在、Listening力向上のために多くのテキストが出版されている。その中で、筆者は、CDだけでなく、DVDで映像を使うテキストであればよいと思っているので、既存のテキ

ストを自分なりのやり方で活用している。

### 4.1　既存のテキストを用いた授業実践

主たるテキストは、テレビニュース原稿を集めたテキストである。筆者は、CNN Student NewやCNNのニュースを扱ったテキストを使っているが、テレビニュースのテキストであれば、どれでも良いと思っている。

筆者がニュース英語を選んだ理由は、いくつかある。ニュース英語は、時事問題で、内容が興味深く、場合によっては、学生が知っている話題も登場する。１課完結型で、ニュースの時間は５分程度で飽きもこない。会話文ばかりでなく、長文もあり、TOEICやTOEFLのListeningの長文問題対策にもなる。アナウンサーによる読み上げ式の文章もあれば、レポーターとインタビューを受けた人との普通の会話文もあり、文章も変化に富む。登場するのは、アメリカ人、イギリス人、オーストラリア人、カナダ人、香港等アジアの国々に住む英語を話す人々等、多岐にわたる、また、登場する人種も性別世代も様々で、多様な英語を聞くことができる。

訛りのある英語、早口の英語、モゴモゴと話す男性の英語等、聞き取るのは難しい。教材用ではないので、話されるスピードも速く、学生たちは、初めて聞いて、これを聞き取ることができるのだろうかという不安を抱く。たとえば、次のような学生の声がある。

「たまに聞き取れる単語はあったけれども、大半の部分は聞き取れなかった。もう少しゆっくりだったらもう少しは聞けたかなとは思う。」（日本文学科女子）

しかし、この速度に慣れるという壁を越えると、学生にとって、自信となる。

テキストの英文スクリプトには、学生に穴埋めさせるための空欄がある。『CNN Student News（５）』のp.48の一部を具体例としてあげる。

Narrator: When it comes to oil, it used to be all about the Middle East. Today, the Persian Gulf still has（１）of crude, but the boom is global. We produce a surplus of ２ to ３ million barrels per day. Oil buried deep beneath the Earth's（２）in shale rock can now be accessed with new technologies like fracking and horizontal drilling.（関戸、p.48）

授業では、大抵、本文に出てくる重要単語を、まず学生に覚えさせて、それからニュースをDVDで見せ、その後、DVDもしくはCDを学生に聞かせて空欄を埋めさせるという流れで授業が行われるのが通例だろう。教科書は、ユニットが15ほどあるので、２日で１課といった割合でユニットを終えていく形が想定されているのではないだろうか。

だが、筆者は、１つの課に何時間もかけ、段階的に教えている。Readingには多読と精

読があるが、筆者は、「精聴」というようなやり方を行っている。具体的には、以下のような流れである。

1．何度もDVDで映像と音声を流し、内容を推測させ、同時に、音やスピードに慣れさせる。
2．その後、日本語訳を配布し、内容を確認。
3．単語を確認させる。
4．最後に英文スクリプトで確認させる。この段階で、文法や訳など、英文の理解に必要なことをすべて教える。
5．単語の穴埋め問題を作成して、学生に解かせる。

以下、授業で、具体的に学生に教示している内容を記述する。

a. 授業全体のコンセプト

次のようなコンセプトに基づいて授業を行っている。

学生には、アメリカで、ひとりテレビニュースを見ている状況を想定させる。英語や日本語の字幕スーパーもなく、英語のニュースを理解しないといけない状況にある。映像と英語の音声で、何の話かを想像し、理解するしかない状況を疑似体験させるのである。

五感を用いて得る情報の中で、視覚による情報の占める割合は非常に高い。映像を見せることから、実は、完全なListeningではない。そこには、一部分、キーワードなどが写される場合もある。映像という視覚による情報が十分あるので、話の流れはある程度つかめるはずと考えている。

アナウンサーやレポーター、インタビューに答える人はどのような表情か、深刻そうか、楽しそうか、声の調子はどうか。着ている服装から、どこの国の人かわかるだろうか。その国について、或いは、その国の現状について、自分は、何か知っていることはないだろうか。新たな登場人物が出てきた時、その人は、どのような役割を担っているように感じられるだろうか。このように、非言語の情報を見て、色々分析をしていく。学生には、このように、様々なものを含む「聞く力」を活用して、内容を理解するよう促している。

b. 映像と音声を聞かせる際の注意事項

英語でも日本語でも、「聞く」行為は、一言一句漏らさず音を拾うことではなく、おおまかに表現されている内容を捉えること、情報を取ることであることを教えている。だが、國學院大學の学生に限らず、日本人の学生は、聞き取ることのできない部分に意識が向く傾向がある。

学生は、「英語を聞き取る」というのは、「話されているすべての語と音を、きちんと聞き取ること」と思っているフシがある。母国語の日本語で話を聞く時も、一言一句、聞き

漏らさずにいるわけではないのに、英語になると、一言一句、聞き漏らすまいと一生懸命である。そのため、彼らは、「大体何を言っているのかをつかむ」のではなく、「きちんと日本語に訳そう」とする傾向がある。そして、聞き取れない語があると、話の内容がわからないような気持ちになってしまう。

「どうしても日本語に訳してしまい、長くなると追いつけなかった」（史学科男子）

一方で、「聞く力」が向上したという自覚がでてきた学生は、以下のようなコメントを書くようになった。

「聞こえないtoやit、theなどをもう聴こうとしないで、話し手が少しでも強めに発した語を追うだけで内容が理解できてしまうのではないかと考えます。100%でなくとも自信がついてきました。」（史学科男子）

このように、すべての単語を聞き取ることができなくてもよいこと、大事な単語だけわかればよいこと、むしろ話し手の伝えようとする情報を取るという意識で聞くことを教示している。

c. 日本語訳での内容把握の意味

話される内容に馴染みがないと、母国語であっても、話の内容がよく分からない場合が多々ある。それは、専門的な知識や専門用語がわからなかったり、話の展開が読めないからである。逆に、知識があり、用語がわかり、話の展開の想像ができると、まったく新しい話が多少入っても、内容を理解することができる。

こうした観点から、英語のスクリプトを見せる前に、テキスト付随の日本語試訳を配布し、内容把握をさせる。この結果、学生からは次のような感想が寄せられた。

「日本語訳を見てから映像を見るとほぼ理解できました！」（経営学科女子）

「映像を見てたのでなんとなくは内容を推そくしてましたが、日本語を見て、何を言っているか理解ができつつあると感じた。」（法律学科女子）

「リスニングは全部聞かないと分からなくなると思っていたが、途中分からなくなっても推測して埋めて理解するのが重要だと分かった。」（史学科男子）

また、日本語試訳を見たことで、聞いていた単語が自分の知っている単語だったことに気がつくようである。

「テキストの内容は日本語を見てからだと知ってる単語がけっこうきこえました。」（法

律学科女子）

「訳がわかったことで単語がつながった。パンケーキすらも聞きとれなかったことに驚いた。」（史学科男子）

d. 単語のチェック

この時点までに、何度も映像を見ながらニュースを聞いているので、速さや音にも慣れてきている。また、キーワードを確認し、音声を聞かせると、キーワードも聞き取れるようになり、その結果、内容もだいぶ理解できるようになる。

「単語１つ１つを聞き取れるようになってきた。また、完全ではないが、だいたい音の速さにも慣れてきた。」（史学科男子）

「単語が分かると映像の意味も分かりました。」（史学科女子）

e. 英文スクリプトによる文章確認

英文スクリプトを配布する。

日本語試訳を配布し、単語の確認をした後に英文スクリプトを配布する理由は、英文スクリプトを先に見せると、学生は、内容を理解したいので、文字情報に頼り、ListeningがReadingになってしまうからである。しかも、彼らのReadingのスピードは遅いので、文字を読むスピードが遅く、Listeningの音についていけなくなる。その結果、テキストのどこの部分が話されているのかがわからなくなってしまう。もともと、話されるスピードが速くて理解できないと思ったものが、文字を見失うことで、さらに速さへの苦手意識が増幅する可能性があることから、それを避けるため、どういう文章なのかを確認するだけにする。

配布した英文スクリプトについては、一文ずつ、きちんと内容確認、文法確認を行う。その後、シャドウイング、音読等を行う。

f. 穴埋め問題を解かせる

テキストには、穴埋め問題があるが、英文スクリプトを最初に見せる時点では、穴埋め問題を解かせず、最後の段階で、テキストの穴埋め問題以外に空欄を作った問題を筆者が作成し、学生に配布し、解答させる。

テキストの穴埋め問題に最初から解答させない理由は、Listeningに苦手意識があり、スペリングを覚えるのがあまり得意ではない学生の場合、穴埋めをさせると、かえって、「聞き取れない」というマイナスの意識を持つ可能性があるからである。とりわけ、スペリングを覚えるのが好きではなく、簡単な単語でもスペリング・ミスをする可能性のある学生の場合、音としては聞き取れていても、スペリングが間違うと、聞き取りができなかったような気持ちになる可能性があり、その後の授業へのモチベーション低下を避けるためで

ある。

g. スペリングを覚えて、試験に備える。

穴埋め問題を解答させると、学生の多くが、聞き取れているつもりでも、案外聞き取れていなかったり、聞き取ることができて、意味がわかっていても、スペリングを書くことができなかったり、スペリング・ミスを多くしてしまうことに気がつく。

CNNニュースを初めて聞いて、聞き取れないと感じた「第一のショック」に引き続いて起こるこの状況を、筆者は、「第二のショック」と呼んでいる。自信がついてきた頃に、こうした細かい作業をすることで、細かいところの聞き取りがまだまだであることに気づく。

しかし、この段階では、内容も理解し、ある程度は聞き取れるようになっているので、試験に備えて、スペリングを覚える等、やることは少なくなっている。

「ほとんど単語をききとることができた。自分ではききとれているつもりだったがディクテーションがあまりよくできなかった。」（外国語文化学科女子）

「書いてみると、スペリングをよくまちがえていた。」（日本文学科女子）

「第二のショック」で不安になるものの、段階を踏んで、徐々にできることを増やしてきているので、学生たちは、そのショックを乗り越え、試験の準備に取り組むことができる。

### 4.2　補助教材

授業では、上記のようにCNNニュースを主教材としているが、補助教材も使っている。それについて、簡単に言及したい。

a. 英語の歌

英語の歌を、授業のウォーミング・アップとして活用している。

CDに入っている歌詞カード（英語・日本語訳）をコピーして配り、歌も、２、３回聞くだけである。歌は、メロディに歌詞をのせるために、通常の会話で話される言葉とは異なり、長く発音されたり、逆に、短くなる場合もある。歌手の声質や歌い方によっても、聞き取りやすさが異なる。よって、学生に穴埋め問題を解かせることはない。

学生たちが授業で聞いた曲を気に入った場合、YouTube等でたやすくアクセスすることができるように、有名な曲を選んでいる。

b. ドラマの視聴

90分授業という時間枠には、映画は長すぎるので、一話完結25分程度のアメリカのドラマ『奥さまは魔女』を、１、２回見せている。CNNのテキスト同様、まず日本語字幕で

内容を理解させ、そのあと、英語字幕を見せる。日本語版字幕でも英語を聞き取ることができることを嬉しく感じたり、日本語版字幕で聞き取っていた単語や表現を、英語版字幕で確認したり、色々な発見があるようである。

「先に日本語で話の内容を頭に入れてから英語で映画を観ると、あの英単語は和訳すると、こうなるんだ、あの文はだいぶいやくされているんだな、等の発見がありました。」（経営学科女子）

c. 公式TOEIC　Listening問題集

半期の授業15回の終わり頃に、TOEICのListening問題を何題か解かせる。

CNNニュースに慣れたあと、TOEICの英語を聞かせると、耳が、より速く、より多様な英語に触れたので、一定のスピードで話されるTOEICのスピードや話し方に抵抗感がなくなるようである。

「TOEICの音声を高校のときにきいたことがありましたが、そのときはすごく速くて、ひとつもききとれなかったと思います。CNNの方が、まくしたてるような速さなので、丁寧でゆっくりだと感じました。」（日本文学科女子）

### 4.3　学生による授業参加

Listeningも、何となくするだけでは、力がつかない。最初の頃はどの位できて、今はどの位できるのかという変化と成長を実感させなければ、できるようになったという気持ちは持たせにくい。意識できる（目に見える）変化がなければ、成功体験の喜びは持ちにくい。

よって、学生にコメント用紙を配り、Listeningをするたびに、どの位聞き取れたのかをパーセント（割合）で評価させている。学生それぞれの感覚なので、低めに評価する学生もいれば、高めに評価する学生もいるだろう。自分の感覚で評価させるだけだが、毎回行うたびに、評価することに慣れ、自分なりの評価基準を持てるようになる。自分自身の基準であるが故に、逆にブレない。このコメント用紙を一旦回収した後、返却している。実際に、どの程度聞き取れているのかは不明である。ある学生の80パーセントの聞き取りより、慎重で低めに採点する他の学生の60パーセントの方が、聞き取れているのかもしれない。聞き取れているかどうかの明確な基準を示し、数値化しないと意味がないというご意見もあるかもしれない。本年度は、國學院大學でListeningだけの授業を行った初めての年で、客観的数値は、試験での評価で学生に還元させるだけに止めた。

しかし、学生自身の感覚によるListening力の向上を、授業内で客観的に実感してもらうことも必要であると考えている。そのために、最初の授業で、学生にTOEICのListening問題を解答させ、最後の授業でTOEICの問題をもう一度解答させるというよう

に、資格試験問題を、この場面で使うことが一つの客観的数値となりうるだろう。

大切なのは自己分析をさせ、成長しているか、進歩したか、それとも変わらないかを確認させることである。自己分析をするためには、授業に積極的にコミットメントせざるを得ない。変化や成長を感じてくると、自己分析に慣れ、筆者が言わなくても、コメント用紙にコメントを書いたり、自己分析のパーセントを書き入れるようになる。

## ５．半年間の授業の成果

前期の最後の授業時に、自己分析シート確認版（『國學院大學　教育開発推進機構紀要』第８号の拙稿、取り組みレポート「大学英語教育における学生のモチベーション向上に対する取り組み」参照）を行い、学生に、「４月と比べて、リスニングやリスニング力について、どう思いますか？何か変化はありますか？」と質問を行った。33名中31名がListening力が向上したと述べ、あまり変わらないは２名で、そのうちの１人は、子供の頃アメリカに住んでいて英語の発音もnative English speakerのように発音をすることのできる学生だった。33名の学生が書いたコメントの中から、いくつかを引用する。

「速い口調でも知っている単語を拾い上げて内容を理解しようという意識ができるようになった。スペリングや文法はまだまだあいまいな部分が多いが、十分に分からなくても、伝えようとしたり、内容を読み取ろうとしたりするようになった。何回も聞くことによって、徐々にわかるようになった。息つぎや、言い方から、伝えたいことを読み取る能力が少しずつ身についてきたような気がする。」（日本文学科女子）

「リスニングは苦手、という怖さが少なくなったように思います。ただ聞きとれないのではなく、なんで聞きとれないのか考えるようになり、その時に、発音記号を学んだことがとても役にたつのだと分かりました。」（日本文学科女子）

「まだ十分に聞き取れているとは思えないが、以前よりは上達したと思う。４月当時は英会話を聞いた瞬間、頭の中で日本語に訳さなければと考えていた。しかし、この授業で英語を聞く時の心がまえが変わり、自然と聞きとれるようになった。」（神道文化学科男子）

「リスニング力は４月の時と比べてついたと思う。この授業で、リスニング力を向上させるためには具体的に何をすればよいのかを学んだ。難しいものを広く浅く聞くのではなく、中級の短い英文を何度も深く聞き、読み、シャドーイングする。授業が進むにつれて、聞き取れる単語や英文が徐々に増えていき、リスニング力が着実についていると実感し、それまで苦手で嫌だったリスニングの勉強が楽しいと思えるようになった。夏休み明けにTOEICを受けるので、その対策として、夏休みはこの授業で実践した方法を利用して、同じテキストの他の英文を用いてリスニングの勉強をしようと考えている。また、息抜きに英語の歌も聞きたい。」（史学科女子）（注：CNNのStudent Newsの文章なので、短い文章であっても、スピードは速い。）

「パーフェクトな聞きとりではなくだいたいなかんじでいいと思えた」（経済ネットワーキング学科男子）

「英語に関しては苦手意識もあり、リスニングの力も全然なかった。しかし、今回の講義を通して今までよりかは確実に聞き取れるようになったと思います。これからも英語のリスニングがもっとできて、TOEICで良い点数がとれるように頑張りたいと思います。」（史学科男子）

「リスニング力は、半年前と比べて伸びたと思っています。この授業で速いものを聞くことによって、その速さになれていき、速いものが普通になることで自分の耳が英語に抵抗がなくなっていきました。これからは、英語で映画などを見て、英語が好きになっていきたいと思いました。」（経営学科男子）

「４月はリスニング力にあまり自信がなかったですが、この授業を受けて少し自信がついたので良かったです。自分でも成長できたと感じることができてうれしかったです。」（法律学科女子）

## ６．結論

國學院大學で教えている学生たちの英語力は様々である。英語が得意で、TOEICで良い点を取りたいと考える学生もいる。他方で、英語が苦手な学生もいる。しかし、苦手でListening力がないとは言っても、６年間英語を学んできて、所々知っている単語を聞き取ることができる能力は持っている。そんな学生が、native English speakerの速いスピードの英語を「理解できる」と思えるようになった時、「できない」ところから、「何が足りないのか」を考えることができるようになる。

現時点で英語力が不十分でも、國學院大學には、前向きに物事を考えることのできる学生が多い。以下、後期、初めて私の授業を受講した学生のコメントを引用する。

「イギリス系とアメリカ系はまた全然ちがうとおもった。ききとれないものがほとんどだったが、知っている単語や映像から想像してききとるのが楽しかったです。これからどんどん英語になれてききとれるようになりたい。また英語力を上げてTOEICの点数も上げたいです。今日、久しぶりにネイティブの発音をたくさんきけて、とても役に立ったなと思いました。」（法律学科女子）

「今回の授業の感想として、難しかった。普段の生活において英語を聞く機会がない為とてもついていけなかった。しかし、内容理解としては30％できたと思う。その理由として、聞き取れた知っている単語やビデオ前の先生の説明で推測できたからである。しかし、誤解があると思うので、これからの授業で理解できるようにしたい。授業を通して苦手なリスニングを少しでも良くしたいと思う。」（史学科男子）

こうした学生たちの後期末の姿が楽しみである。

できないと思ったことができるようになって自信を持ち、嬉しそうな表情になったり、喜びのコメントを書く学生の姿に励まされ、支えられ、授業を行っている。拙稿は、洞察力や分析力を持ち、頑張って学んでいる学生たちのおかげで完成をみたのであり、学生たちとの共同（協働）作業であったとも言える。この場を借りて、学生たちに感謝したい。

筆者は、「聞く力」とは何かを考え続け、授業においても、その問いを投げかけてきた。その試行錯誤へのエールにも思える一学生のコメントを引用して、拙論を締めくくりたいと思う。

「映像からわかったこともあったので、耳だけでなく全ての感覚から英語を理解できるようになりたい。」（経営学科男子）

**参考文献**

甘利俊一監修、岡本仁編　『シリーズ脳科学４ 脳の発生と発達』　東京、東京大学出版会、2008年。
関西大学　CNN英語研究会　『CNN ビデオで見る世界のニュース（18)』東京、朝日出版社、2017年。
加瀬次男著　『日本語教育のための音声表現』　東京、学文社、2001年。
ジョーン･ルービン、アイリーン･トンプスン著、西嶋久雄訳　『外国語の効果的な学び方』　東京、大修館、1998年。
関戸冬彦、小暮正人、Jake Arnold、Ken Ikeda、長和重著　『CNN Students News（５）』東京、朝日出版社、2017年。
馬場禮子編著、『臨床心理学概説』　東京、放送大学教育振興会、2007年。
ラリー・スワンソン著　石川裕二訳　『ブレイン・アーキテクチャ：進化・回路・行動からの理解』　東京、東京大学出版会、2010年。